九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

自尊感情の変容に関する実践的研究

吉田, 達也
黒木町立黒木小学校

https://doi.org/10.15017/9046

出版情報：生活体験学習研究. 4, pp.55-61, 2004-01-30. 日本生活体験学習学会
バージョン：
権利関係：

日本生活体験学習学会誌　第４号　55―61（2004）

自尊感情の変容に関する実践的研究

吉　田　達　也

A Practical Study on the Change of Self-Esteem

Yoshida　Tatsuya

要旨　現在学校では、いじめ、不登校、学級崩壊等さまざまな問題を抱えている。その原因は多岐にわたると思われるが、大きな原因の一つに児童生徒が自分自身に対して自信が持てない、自己のありのままを受け入れられないといった自尊感情の低さもあるのではないかと考えた。そこで、教師の意図的な介入によって自尊感情を高めることを目的として、調査・実践を行った。

研究では、Ｅ小学校４年生と５年生に焦点を当て、遊びの活性化、コミュニケーション能力の育成、支持的な学級づくりを行うことにより自尊感情が変容するかを検討した。その結果、実験校のＥ小５・６年生はローゼンバーグ、井上信子の自尊感情得点とも上昇した。Ｅ小と統制群の得点ののびに有意差があるかｔ検定による分析の結果、井上の得点ののびは５、６年生とも有意差がみられ、ローゼンバーグの自尊感情得点の伸びの差では、６年生において有意差がみられた。

これらの結果から、①遊びの活性化　②コミュニケーション能力の育成　③支持的な学級づくりの介入が有効であり、教師の意図的介入で自尊感情は変容するという結果が得られた。

１　問題と目的

遠藤由美（1999）[1]は、自尊感情は、「精神的健康の基盤や適応の基盤となす」と述べている。パーキイ（Purkey,. W.W., 1970）[2]は、学業達成に及ぼす子どもの自尊感情の自己成就的予言の効果にについて論じるなかで、「好意的な自己イメージをもつことが高い能力や将来的学業達成への期待の認知を導きやすい」としている。このように、自分自身を肯定的に見ているか否定的に見ているかは、生きていくうえでの健康や行動に大きく影響を及ぼしているのである。

現在学校では、いじめ、不登校、学級崩壊等さまざまな問題を抱えている。また、17才少年によるバスジャック等、青少年による凶悪犯罪も増えている。教室にいる児童一人一人に目を向けても、忍耐力がなくすぐキレる、自己中心的で協調性に乏しい、自分の興味あることには関心を示すがそれ以外のことに対しては意欲がない、また関心を示してもすぐにあきらめる、自分を向上させようという意欲がないといったような子どもが増えてきたと実感している。その原因は、社会の変化、家庭教育力・学校教育力の低下など多岐にわたると思われるが、大きな原因に児童生徒が自分自身に対して自信が持てない、自己のありのままを受け入れられないなど自尊感情の低さもあるのではないかと考える。すなわち、自分を価値ある大切な存在であると思えないので自信がもてず無気力になる、自暴自棄になって非行に走る。人を大切にしない、大切にで

連絡・別刷り請求先（Corresponding author）
黒木町立黒木小学校（〒834-1216 福岡県八女郡黒木町大字桑原26　TEL（0943）42-0039　FAX（0943）42-4651）
Kurogi Elementary School (26 Kuwahara, Kurogi-machi, Fukuoka Pref., Japan 834-1216)

きないなどの問題が生じるのである。実際、現在の子どもをめぐるさまざまな問題行動との関連で自尊感情の低さを指摘する声は多い。

これまで行われてきた、自尊感情の変容に関する研究をみると、単独に実験を試みたり比較的短期間の研究であったりしたものが多い。しかしながら、実際の学校というところは総合的なところでありさまざまな要素が存在するのである。そういった意味で実際の学校現場では総合的に、ある程度の期間をおいて自尊感情を育成することが不可欠であると考える。

そこで、本研究では、他校と比較して自尊感情得点が著しく低かったＥ小学校の４年生11名（現５年生）と著しく高かった５年生11名（現６年生）に焦点を当て、約１年間にわたり遊びの活性化、コミュニケーション能力の育成、支持的な学級づくりを行うことにより自尊感情が高まるかを明らかにすることを目的とする。そもそも自尊感情は、温かい人間関係、安定して落ちついた人間関係の中から育成されるものだと考える。本研究では遊びの活性化、コミュニケーション能力の育成を通して学級の人間関係を深め、支持的な学級を育成する。また、支持的な学級の雰囲気のもとに遊びが活性化し、コミュニケーション能力も高まるというように相互に関連し補完しあいながら自尊感情を高めようと考えた。尚、実践に当たり以下の仮説を立てた。

仮説「遊びを活性化しコミュニケーション能力の育成を中心とした支持的な学級づくりを行えば、自尊感情も向上するであろう。」

２　実践方法

実践対象児

Ｙ郡にあるＥ小学校（６学級73名）の４年生（現５年生11名）５年生（現６年生11名）

実践期間　　2001年１月～2001年12月

実践の流れ

①　2001年１月　研究者がＥ小に研究依頼を行う。研究内容の説明を行う。

②　Ｅ小および統制群の小学校に自尊感情得点および実態調査（１～２月）を行う。

③　Ｅ小において各担任により実践開始、研究者は昼休みの遊びに入ったりＴＴに入ったりする。(週３回程度)

④　2001年４月　新年度になり、再度Ｅ小に研究依頼を行い、実践内容を説明する。

⑤　Ｅ小にて実践の継続、および新担任による実態調査を行う。

研究者は、遊びの活性化の継続、４月より新たに現５年生の社会科の授業を受け持つ。

⑥　12月　Ｅ小および統制群の小学校に自尊感情得点および実態調査を行う。

３　実践内容

(1)　支持的な学級づくり

○支持的な学級づくりの基本的な心得

子どもたちと関わるうえでの基本姿勢として片岡徳雄（1996）[3]が提唱した「支持的風土を創る法」を参考に以下のようにした。

〈子どもたちの態度や心がけ〉

①　どんな考えもバカにしたり、笑ったりしない。

②　相手の身になって考える。

③　相手の発言や行いに、どこかよいところはないか、必死で探す。

④　他人の発言に対する反応は、ゆっくり間をおいて示す。

〈教師の心がけ〉

①　子どものよいところを見つけ、ほめる。

②　子どもの失敗やまちがいに対して、励まし、力づける。

③　支持的風土を壊すような子どもの言動には、厳しく対処する。

④　多角的で形成的な評価に心がけ、子どもの評価を固定化しないようにする。

⑤　規則を細かくしたり多くつくったりせず、罰則でしばったりしない。

※　研究者は、支持的な学級経営になるように担任教師と打ち合わせを行う。

(2)　遊びの支援

○実践の基本姿勢

実践を行うにあたり、子どもたちと関わるうえでの基本姿勢として横山（1992）[4]が提唱した「豊かな友達関係と遊びを育てる方法」を参考にし、以下のように

した。

① あくまで子どもの自発性を尊重し、教師は共に遊ぶという立場に立つ。

② 休み時間の実践であり、授業でないので決して強要せず、一緒に遊びを考えたり実際に遊んでみたりして、子どもの興味・関心をかき立てるようにする。

③ 教師が遊びの中心となるのではなく、子ども同士が積極的に関わり、活動するようにする。

④ 子ども達が自分たちで自発的、意欲的に遊べるようになったら、そっと引くようにする。(遊びの自立の促進)

⑤ 時々、けんかや仲間はずれなどが起こるだろうが、これは子どもが発達していくうえで一つの社会的なトレーニングとなる貴重な体験なので、軽度のトラブルの場合はできるだけ口を出さないようにする。

⑥ 子どもの危険な行動、反社会的な行動はきちんと注意する。

⑶ コミュニケーション能力育成に向けての支援

○実践の基本姿勢

実践を行うにあたり、子どもたちと関わるうえでの基本姿勢として横山（1999）[5]が提唱した「コミュニケーション能力を育てる方法」を参考にし以下のようにした。

① 子どもの言葉の先取りをせず、最後まで言わせるようにする。

② 子どもからの自発的な質問・意見・感想などを積極的に応答するようにする。

③ 子どもにメッセージ体験や発表体験、説明体験の場を積極的に与えるようとする。

④ 子ども同士のコミュニケーションの場を積極的にセットする。

⑤ 子どもに異年齢、異世代の人とコミュニケーションする場を積極的にセットする。

⑥ よい表現についてはしっかりほめてやる（否定的な言動をせず、できるだけプラス評価をする）。

⑦ 必要に応じて、どのように表現したらよいか、言い方のモデルをしめしてやる。

⑧ 極端に好ましくない表現をした時は、きちんと注意する。

⑨ 教師自身が、コミュニケーションに関してよきモデルであるよう努める。

⑩ 聞く態度のしつけをきちんとする。

4 調査内容と方法

⑴ 自尊感情の測定

調査対象児

実験群

Y郡にあるＥ小学校（６学級73名）４年生（現５年11名）、５年生（現６年11名）

統制群

① Y郡にあるC1小学校（６学級84名）４年生（現５年12名）、５年生（現６年16名）。

② Y郡にあるC2小学校（13学級275名）４年生（現５年44名）、５年生（現６年54名）。

③ Y郡にあるC3小学校（６学級227名）４年生（現５年38名）、５年生（現６年40名）。

調査の内容

上記４小学校の５、６年生に、ローゼンバーグ[6]の自尊感情尺度と井上信子[7]の児童用自尊心尺度を用いて、自尊感情を測定した（以下、ローゼンバーグの自尊感情尺度得点をR尺度得点、井上信子の自尊心尺度得点をI尺度得点と記す）。

調査の手続き

各小学校の校長に調査を依頼し、質問紙を配布した。その後、各担任が実施、後日回収した。

調査期間

調査は実践前の2001年の１月～２月と、実践終了後の１月の計２回実施した。

⑵ 児童の実態把握

調査対象児　Ｅ小学校４、５年生２クラス

〈児童に対して〉

調査内容

ア．学校生活に関するアンケート調査

① 学校の昼休みに関するもの　５項目

② 友達や遊びに関するもの　８項目

③ 話すことや聞くことに関するもの　16項目

④ 学校好感度に関するもの　６項目

イ．学級生活満足度の測定

河村茂雄（1999）[8]作成の学級生活満足度尺度12項目（４件法）を用いた。

調査の手続き

Ｅ小学校４、５年生に研究者が質問紙を配布、実施

した。

調査期間

調査は実践前の2001年の１月と、実践終了後の12月の計２回実施した（学級生活満足度の測定は４月と12月に実施）。

〈担任の先生に対して〉

調査内容

ア．児童の実態についてのアンケート調査（個別）

遊びやコミュニケーション能力、支持的な学級づくりに関する児童の実態について、18項目を作成し、個別に４段階で評価してもらった。

調査の手続き

Ｅ小学校４、５年生担任に研究者が質問紙を配布した。その後担任が記載し、後日回収した。

調査期間

調査は2001年の４月と、実践終了後の12月の計２回実施した。

５　結果（紙面の関係上、一部を記載する）

①　自尊感情得点の変化

ア．５年生

Ｉ尺度得点の平均値は、E小は81.46点から93.64点と12.18点上昇した。C1小は、88.42点から89.58点と1.17点の上昇、C2小は、100.35点から94.75点と5.60点の低下、C3小は、91.18点から94.58点と3.39点の上昇であった（図１参照）。実践前得点と実践後の平均値に有意差があるかｔ検定による分析の結果、Ｅ小およびC2小において有意差が認められた。このことからＥ小は、事前よりも事後が自尊感情得点が有意に高く、（$t=3.282, df=10, p<.05$）、C2小は、事前よりも事後の得点が有意に低いといえる（$t=3.704, df=39, p<.05$）。

Ｅ小と他校の得点の伸びを実践前得点と実践後得点の差を算出し、その平均値で比較すると、Ｅ小は12.18点上昇し、他校は1.15点低下した。伸びの差は11.03点であった（図２参照）。Ｅ小と他校の得点の伸びの平均値に有意差があるかをみるためにｔ検定を行った結果、有意差がみとめられた。このことから、Ｅ小の自尊感情得点が有意に伸びたといえる（$t=3.713, df=94, p<.05$）。

イ．６年生

Ｉ尺度得点の平均値は、Ｅ小は104.18点から111.36点と7.18点上昇した。C1小は91.06点から101.13点と10.06点の上昇、C2小は96.59点から94.67点と1.92点の低下、C3小は93.79点から92.41点と1.38点低下した（図３参照）。実践前得点と実践後の平均値に有意差があるかｔ検定による分析の結果、Ｅ小およびC1小に有意差が認められた。このことから、Ｅ小、C1小は、自尊感情得点が事前よりも事後が有意に高いといえる（Ｅ小$t=2.489, df=10, p<.05$）（C1小$t=4.219, df=15, p<.05$）。

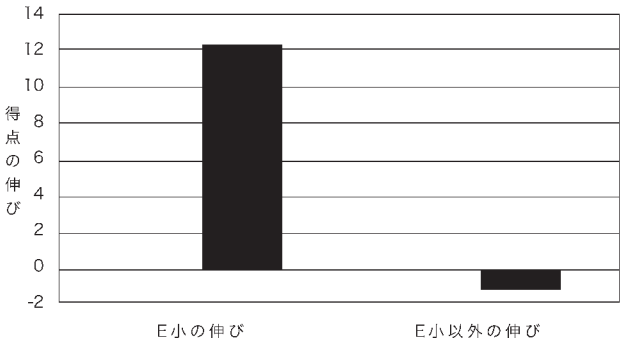

図２　第５学年のＥ小と他校の井上信子尺度得点の伸びの差

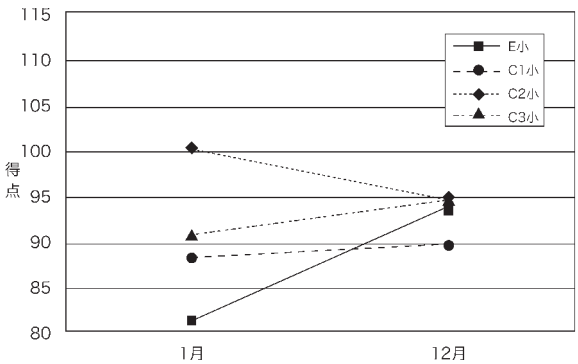

図１　第５学年井上信子尺度得点の比較

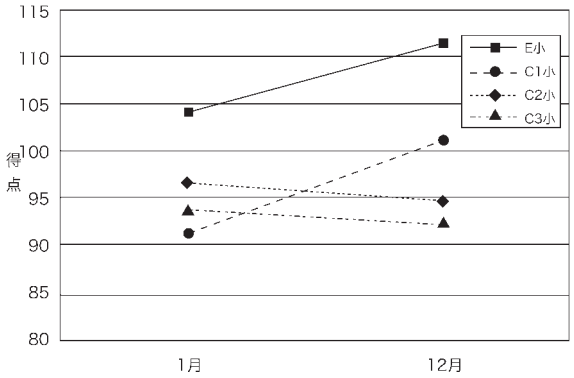

図３　第６学年井上信子尺度得点の比較

Ｅ小と他校の得点の伸びを実践前得点と実践後得点の差を算出し、その平均値で比較すると、Ｅ小は7.18点上昇し、他校は0.20点上昇した。伸びの差は6.98点であった(図４参照)。Ｅ小と他校の得点の伸びの平均値に有意差があるかをみるためにｔ検定を行った結果、有意差がみとめられた。このことから、Ｅ小の自尊感情得点が有意に伸びたといえる（t＝2.109 ,df＝108, p<.05)。

②　仲間関係図の変化

学校生活アンケート調査の「あなたは、学校で仲のよい友だちはいますか」「『いる』」とこたえた人は、仲のよい友だちを書いて下さい」の質問項目から、相互選択した子ども同士を線で結んだ仲間関係図を作成し、実践前後で比較してみた。

図５、図６をみると、男女とも明らかに仲間関係が広がっている。また、実践前は同学年間での仲間集団だったのが、実践後は、学年の壁をこえて異学年間に広がり大きな一つのまとまりになってきていることが分かる。このことは特に、男子において顕著である。

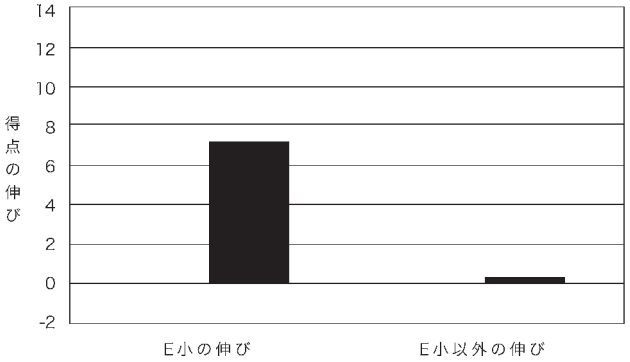

図４　第６学年のＥ小と他校の井上信子尺度得点の伸びの差

③　児童のアンケート調査から

児童のアンケート調査のうち、支持的な学級づくりに関する質問１項目を取り上げ、学級全体の得点を１月と12月で比較してみた。

児童のアンケート調査のうち「あなたは学校に行くのが楽しいですか」の質問（５件法）に対して、５年生は32点から48点と16点の大幅な伸びを示した。６年生はもともと53点と高得点（最高点55点）であったが、12月もそのまま良好な状態であった（図７参照)。

④　学校生活満足度調査から

学校生活満足度尺度集計座標を４月と12月を比較してみると、５年生では、学校生活満足群が０名から３名に、６年生が５名から９名に増加していた。また、ほとんどの児童が、４月に比べて、学級生活満足度が高くなっていた。

学校生活満足度尺度の、承認得点、被侵害得点をそれぞれ比較すると、承認得点が５年生が3.27点の上昇、６年生が２点の上昇であった(図８参照)。被侵害得点は、５年生が0.09点の低下、６年生が0.91点の低下であった(図９参照)（※被侵害得点については、得点が低い方が侵害を被っていないことを表す)。それぞれの得点が有意差があるかどうか、ｔ検定を行ったところ、５年生の承認得点が有意に上昇していた（t＝2.253, df＝10，p<.05)。

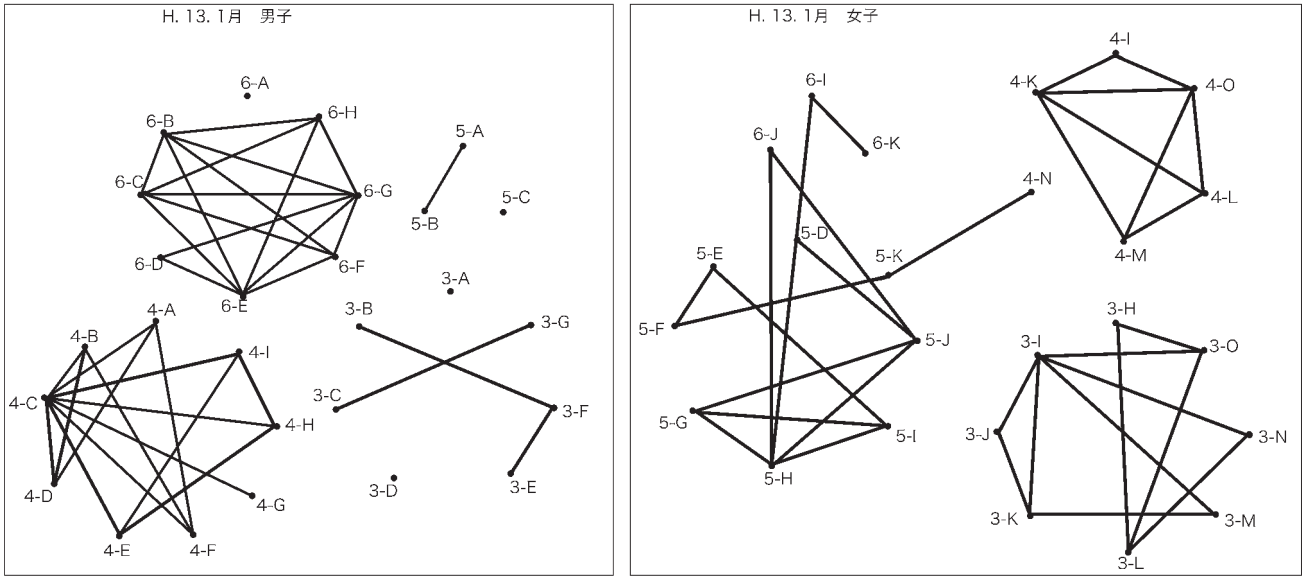

図５　実践前の仲間関係図

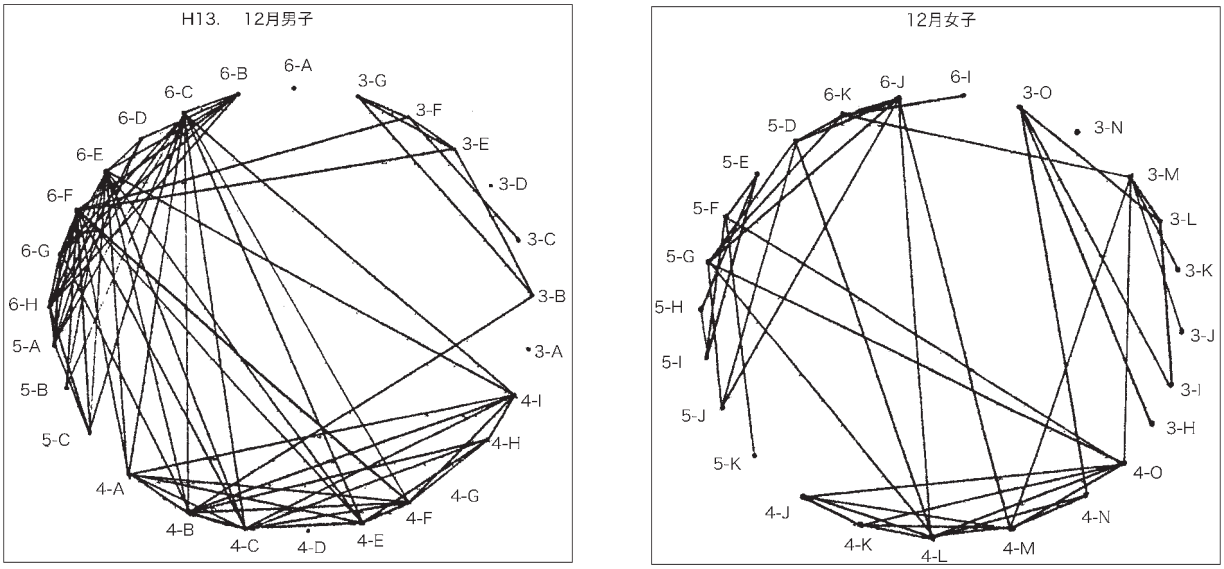

図６　実践後の仲間関係図

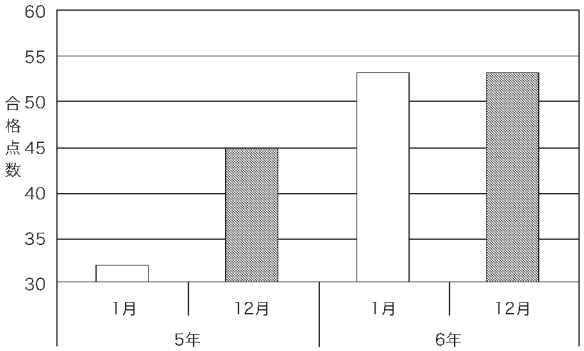

図７　あなたは学校に行くのが楽しいですか

６　考察

５年生のＲ尺度得点の平均は、Ｅ小およびC3小が上昇していた。Ｉ尺度得点の平均は、Ｅ小およびC1小・C3小が上昇していた。ｔ検定により事前と事後の伸びの差を検定すると、Ｉ尺度得点においてＥ小のみが有意に伸びていた。

Ｅ小と他校の得点の５年生の伸びを比較すると、Ｒ尺度・Ｉ尺度得点とも、Ｅ小が上昇し、他校は低下していた。ｔ検定により伸びの差を検定すると、Ｉ尺度得点において、Ｅ小が有意な伸びを示していた。

６年生では、Ｒ尺度得点・Ｉ尺度得点ともＥ小およびC1小が上昇していた。ｔ検定により事前と事後の有意差をみると、Ｒ尺度得点ではＥ小、Ｉ尺度得点においてはＥ小およびC1小において有意な伸びがみられた。

Ｅ小と他校の得点ののびの差をｔ検定により検定すると、Ｒ尺度得点・Ｉ尺度得点いずれにおいてもＥ小が有意な伸びを示していた。

これらの結果をみると、明らかにＥ小の自尊感情得点が伸びている。このことはＥ小で行った①遊びの活性化②コミュニケーション能力の育成③支持的な学級づくりの介入が有効であったことを物語るもので、仮説「遊びを活性化しコミュニケーション能力の育成を中心とした支持的な学級づくりを行えば、自尊感情も向上するだろう」を支持するものと考える。そこで、これらについて考察を加える。

まず、遊びの活性化であるが、児童のアンケート調査をみると外で遊ぶ児童や外での遊びを好む児童が増えてきている。また仲間関係図をみても分かるようにそれまで、学年間でのつながりしかなかったものが、学年の枠を超えて縦のつながりが生じ、大きな一つの集団に集約してきている。このことは、仲間関係が広がってきていることを示すものである。

このように変化してきた要因を考えると、学校全体として遊びを奨励したことが大きな要因といえる。遊びを奨励することで、６年生をリーダーとした学年の枠を超えた集団遊びが広がった。この遊びを通して上級生は下級生の面倒をみたりトラブルの仲裁をしたりする。このことは、下級生の信頼を得て、自分も役に立つ存在なのだという気持ちを育てる。一方、下級生は上級生と一緒に活動できたという充実感を味わうと

いうようにお互いに好影響を与え合う。このように6年生を中心に学年の枠を超えて遊びを活性化することで、信頼関係が生じ仲間関係が広がってきたのだと思われる。

コミュニケーション能力の育成については、児童のアンケート調査・教師による実態調査をみても６年生が若干向上しているが、ほとんど差がみられない。これは、各先生方がコミュニケーション能力の育成の重要性は認識してあるものの、教科内容の指導に追われ具体的な指導が出来にくかったのでないかと考えられる。その他、コミュニケーション能力がどれほど育っているかを具体的に評価しにくいということも言えるであろう。また、コミュニケーション能力の育成は、学級が支持的な環境でなくては、自分の考えていることや思っていることを安心して述べることができず、コミュニケーション能力の育成は難しいといった面もある。そういった意味からすると、学級の雰囲気が支持的になってきている今から向上していくとも考えられる。

支持的な学級づくりについては、児童のアンケート調査、学校生活満足度尺度、教師による実態調査等の結果をみると、５、６年生いずれも向上している。これは遊びの活性化やコミュニケーション能力の育成を試みたことで子どもたち同士の心のふれあいが出来、学級が居心地良いものになってきたのだと考える。また、各担任の先生が支持的な風土づくりの基本的な心得にもとづいて、支持的な風土になるよう意識して学級経営を行ったことも大きな要因といえる。実際に実践前に比較して５、６年生とも学級の雰囲気が和んできた。特に、５年生においては、それが顕著である。

今回の研究で、自尊感情を高めるためには人間関係の育成が非常に重要であることが示された。遊びもコミュニケーション能力の育成も支持的な学級づくりもつまりは、人間関係を育成するものである。子どもたちの自尊感情は豊かな人間関係の中で育まれていくのである。このことは、今学校で起こっているさまざまな問題に対する大きな示唆を与えるものになるであろう。

注

⑴　遠藤由美　1999　自尊感情　中島義昭・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁桝算男・立花政夫・箱田裕司（編）心理学辞典　有斐閣　pp343-344

⑵　Purkey, W.W.　1970　*Self-concept and school achivement*.　Englewood Cliffs: Prentice-Hall.

⑶　片岡徳雄　1996　個性を開く教育　黎明書房　pp.174-175.

⑷　横山正幸　1992　豊かな友だち関係と遊びを育てる方法（未発表）

⑸　横山正幸　1999　学校嫌いの子をなくすために―コミュニケーション能力を高めよう―　福岡県教育委員会　玄海！ハートキャンプ報告書―不登校の子どもたちのためのリフレッシュプログラム―　pp.59-63.

⑹　Rosenberg,　M.　1965　*Society and the adolecent self-image*.　Princeton:　Prince-ton University Press.

⑺　井上信子　1986　児童の自尊心と失敗課題の対処との関連　教育心理学研究、34、10-19

⑻　河村茂雄　1999　崩壊しない学級経営をめざして　学事出版　巻末付録